

## 2者間会話場面におけるうなずき・発話・微笑が他者の印象に及ぼす効果

082G059 藤井早紀・082G073 山根由梨・082G077 山本芽衣

### 問題・目的

人はどのようなコミュニケーションを行えば、他者にいい印象を与え、快適な対人関係を保つことが出来るだろうか。私たちは、日常のコミュニケーションにおいて、視線の動きやうなずきなどのジェスチャーを用いて、対話の円滑なやり取りを行っている。特にうなずきに関して、川名(1986)は、話し手が相づち・うなずきを行う聞き手を好意的に評定することを示している。さらに、実験者に指示されて行った相づち・うなずきでありながら、聞き手も自分が相づちをうった話し手の方を好意的に評定していることが分かった。このようなささやかな行為であっても、それが社会的承認の満足をもたらすものであり、相互作用を増進する報酬価を持つ手がかりとなることが認められた。

前田・堀内・市川(2003)らによると、うなずきは、あいづちと同様に相手話者に対する何らかの応答動作として生じる場合よりも、自己発話内の方が多く生じる傾向が見られた。うなずきが二人の話者で同時に発生する現象が多いことが示唆されている。また、女性のペアでは一貫してうなずく頻度が高くなっていた。

本研究では、初対面の2者間で対話を行い、その前後で相手に対する印象がどのように影響されるかを調べる。また、前田他(2003)の研究では、男性ペアより女性ペアでうなずきが生じやすいという結果が得られた。そこで本研究では、男女間のペアにおいてもうなずきの頻度の差が生じるのかを検討する。

### 方法

**実験参加者** 18~22歳の大学学部学生及び卒業生50名(男性8組, 女性8組, 男女9組)が本研究に参加した。平均年齢は20.56歳であった。

#### 刺激 感情表出的コミュニケーションテスト

(ACT)日本語版(大坊, 1991)を使用し、参加者のコミュニケーションにおける感情表出傾向を測定した。また、林(1978)らの特性形容詞尺度を用いて、対話の前後で相手に対する印象がどのように変化したのか調査した。用いた形容詞対は、「積極的な-消極的な」、「人のわるい-人のよい」、「なまいきでない-なまいきな」、「ひとなつっこい-近づきたい」、「にくらしい-かわいらしい」、「心のひろい-心のせまい」、「非社交的な-社交的な」、「責任感のある-責任感のない」、

「軽率な-慎重な」、「恥じしらずの-恥ずかしがりの」、「重厚な-軽薄な」、「沈んだ-うきうきした」、「堂々とした-卑屈な」、「感じのわるい-感じのよい」、「分別のある-無分別な」、「親しみやすい-親しみにくい」、「無気力な-意欲的な」、「自信のない-自信のある」、「気長な-短気な」、「不親切な-親切な」の20項目であった。

対話状況はビデオを用いて記録し、うなずき、発話、微笑について ANVIL 5.0.20 (行動分析のためのビデオ注釈ツール; Kipp, 2001 による)を用いて分析した。

**装置** 対話場面の記録のために Logicool 社の Web 用ビデオカメラ C910 および webcam software を用いた。

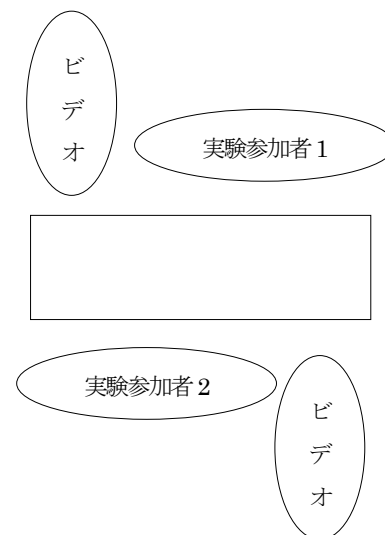


図1.席の配置

**手続き** まず、会話場面をとるためのビデオカメラを実験参加者が座る席の後ろに設置した。実験参加者には対面した席に座ってもらい、お互いに名前・学科名を自己紹介してもらった。

次に質問紙に答えてもらうために、お互いの後ろ側に設置してある席に背中を合わせて座ってもらった。そこでは、自己紹介したときの相手の印象を、特性形容詞尺度を用いて回答してもらった。

次に、本実験が会話を目的とした実験であること、話す内容はお互い自由に構わないということ、普段から友達同士でしている感覚で会話をしてもらうことを教示した。なお、会話をするときに話題が尽きないように12項目の話題リストとその他の項目が書かれた

アンケート用紙を提供し、話す内容が決まったことを確認してから、実験を始めた。記録時間は約 10 分間とし、その間お互いに決め合った内容を話してもらった。始めるときは「始めてください」、終わるときは「やめてください」というまで、会話を続けてもらった。ビデオ記録を終えたあと、またお互い後ろの席に移ってもらい、話した後の相手の印象について、再度、特性形容詞尺度を用いて答えてもらった。また、自身自身の普段の感情表出傾向について、ACT 日本語版を用いて回答してもらった。

この作業を、男女 (FM)、女性同士 (FF)、男性同士 (MM) のそれぞれの組に行った。

### 結果と考察

参加者の ACT 得点とうなずき、発話、微笑の合計時間、および特性形容詞尺度による対話相手の評価が対話前後でどのように変化したかの変化得点の間で、相関分析を行った。

その結果、全体を通じた特徴として、まず、ACT 得点が高い参加者ほど発話時間が長かった ( $r = .286$ )。また ACT 得点が低い参加者ほど、対話後に分別があると評価が変化した ( $r = .312$ )。発話時間は少ないほど親しみやすいと評価される傾向にあった ( $r = .298$ )。微笑が少ない参加者は、人がよく ( $r = -.335$ )、分別がある ( $r = .355$ ) と評価が変化していた。うなずきが多いほど、堂々としていて ( $r = .355$ )、自信がある ( $r = .315$ ) と評価が変化した。

女性同士の対話に限定した相関分析では、ACT 得点が高いほど発話時間が長いことがわかった ( $r = .532$ )。なお、この傾向は男性同士や男女間では認められなかった。また女性同士において、ACT 得点が低い参加者は、対話後に責任感があると評価が変化した ( $r = .599$ )。発話は少ないほど親しみやすいと評価された ( $r = .598$ )。微笑が少ないと人がよいと評価された ( $r = -.561$ )。さらに、女性同士においてうなずきは大きな影響をもち、うなずきが多いほど、恥ずかしがりではなく ( $r = -.516$ )、うきうきして ( $r = .625$ )、親しみやすく ( $r = -.645$ )、自信がある ( $r = .557$ ) と評価が変化した。

男性同士の対話に限定した分析では、ACT 得点が高い参加者ほど、うきうきして ( $r = .655$ )、自信がある ( $r = .625$ ) と評価された。また、発話時間が少ないと、慎重だと評価された ( $r = -.583$ )。微笑が多いと、人が悪く ( $r = -.614$ )、慎重で ( $r = .502$ )、堂々としていて ( $r = -.545$ )、分別がある ( $r = .672$ ) と評価された。女性同士とは異なり、男性同士においては、うな

ずきが対話による相手印象の評価に有意に影響することとはなかった。

男女間の対話についての分析では、まず、女性による男性に対する評価についてみると、ACT 得点が低い男性ほど分別があり ( $r = .674$ )、うなずきが多いほど恥ずかしがりとして評価されていた ( $r = .669$ )。

これに対して、男性による女性への評価では、ACT 得点が高い女性ほど、なまいきで ( $r = .806$ )、かわいらしくなく ( $r = .832$ )、分別がなく ( $r = .790$ )、短気 ( $r = .864$ ) だと評価されていた。微笑の多い女性は、対話後に心が広いと評価されていた ( $r = -.670$ )。また、うなずきが多い女性ほど、自信があり ( $r = .677$ )、親切 ( $r = .735$ ) だと評価されていた。

このように、対話者の性別によって、発話やうなずき、微笑が印象評価に及ぼす影響は異なると考えられた。コミュニケーションにおける感情表出が多い人は、長くしゃべる傾向にあるが、それは女性同士において顕著な傾向であった。また、印象評価に対しては、男性同士だと感情表出が多い方がうきうきして自信があると評価されていたが、女性同士では、感情表出が少ない人の方がむしろ責任感があると評価されたり、男女間における男性による評価でも、感情表出が少ない女性の方がなまいきでなく、かわいらしくて、分別があり、気長であるといったように、ポジティブな印象形成がなされることがわかった。

本研究の結果、対話によって初対面の相手に対する印象は大きく変わることがわかった。またその変化に、発話量や微笑、うなずきが影響していた。また、発話量は必ずしも好意的な方向に印象を変化させたわけではなかったが、微笑やうなずき、特に女性のうなずき行動は好意的な方向への印象変化を引き起こすことがわかった。

### 引用文献

- 大坊郁夫 (1991). 非言語的表出性の測定 : ACT 尺度の構成 北星論集 (文), **28**, 1-12.
- 林文俊 (1978). 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), **25**, 233-247.
- 川名好裕 (1986). 対話状況における聞き手の相づちが対人魅力に及ぼす効果 実験社会心理学研究, **26**, 67-76. (大坊, 1998 による)
- 前田真季子・堀内靖雄・市川薫 (2003). 自然対話におけるジェスチャーの相互関係の分析 ヒューマンインターフェース, **102-7**, 39-46.
- Kipp, M. (2001). ANVIL: A generic annotation tool for multimodal dialogue. *Eurospeech 2001* (Scandinavia)